編集室

プレネイタルビジット

プレネイタルビジットは平成3年に厚生省の「これからの母子保健に関する検討会」で出産前の小児保健指導事業の推進が提言されたことに始まる。翌年には実施主体を市町村単位としたモデル事業が開始され、平成6年にはガイドラインが作成されたが、事業への理解不足などから広く普及に至らなかった。平成12年に制定された「健やか親子21」で、育児不安の解消と児童虐待の対策から、その必要性が再認識され、医師会単位のモデル事業となったが、その後発展しているとは言い難い。

このような通常のプレネイタルビジットのほかに、ハイリスク妊婦へのプレネイタルビジットがある。両親にとって、自分たちの子どもが「小さく産まれる」ということは、それまで予測しなかった現実で、お母さんにとっては健康な赤ちゃんを失う喪失体験になる。満期で産むことができなかったという不全感や赤ちゃんに対する申し訳ない気持ち、発育発達に対する将来の不安をもっている。また、赤ちゃんが長期にNICUに入院し母子分離を余儀なくされると、赤ちゃんへの愛着形成が難しく、退院後の育児困難、虐待やネグレクトにつながる危険性をはらんでいる。

超低出生体重児を出産した母親に対する当院総合周産期医療センターでのアンケートでは、約9割の母親がNICU医師のプレネイタルビジットを望んでいた[1]。現在、広島市民病院では希望する御両親にプレネイタルビジットを行っている。できるだけ時間調整を行い、御両親揃ってお話ができるようにしている。この訪問で大切なことは、親自身の育てる力を引き出すことであり、児についての正確な情報とともに、家族の混乱した気持ちを整理して現実を見つめることができるように支援することである。その中で、「小さく産まれる」ということは病気ではなく、満期で産まれた赤ちゃんに比べて適応が遅れること、その適応を助けるのがNICUでの治療であることをお話している。そして、救命できないリスクはあっても、より良い状態で赤ちゃんが生まれるために、産科医、助産師、NICUのスタッフが一緒にいることを伝えている。

NICUは救命の場であるとともに、親子が出会い親子関係が育つ場である。お母さんと赤ちゃんは、いつも一緒にいて、抱っこや授乳など、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚などのさまざまな感覚刺激を介した母子相互作用を積み重ねて絆を深めていく。保育器の中でも、触ったり、おむつを替えたり、声をかけたりできること、チューブ栄養が始まったらお口の中にミルクを入れてあげることができることなど、お母さんとしての役割がたくさんあることをお話している。お母さんにとって「小さく産まれた」と感じるのは赤ちゃんの実際の体重ではなく、お母さん自身の心の距離であると思っている。病院でのスタッフによるプレネイタルビジットを通じた早期介入が、お母さんの心を癒し、母子関係を深める支援につながればと思っている。どんなに小さくても赤ちゃんは愛されるために生まれてくるのだから。　（林谷　道子）

1)　林谷道子他：超低出生体重児の母親に対するアンケート結果と母子支援の今後の課題.
周産期医学37:1470-1474, 2007

広島県医師会速報　2013年（平成25年）7月5日
●発行所／社団法人　広島県医師会　〒733-8540　広島市西区観音本町一丁目1番1号　TEL 082-232-7211 FAX 082-293-3363
広島県医師会HP　http://www.hiroshima.med.or.jp/　E-mail : kouhou@hiroshima.med.or.jp
●編集者／広島県医師会長　平　松　恵　一
（広報委員）生田 隆穂、豊田 紳敬、小園 亮次、佐々木 龍司、豊田 章宏、中尾 三和子、奈良井 章人
林谷 道子、檜山 桂子、茗荷 浩志、吉田 良順、小笠原 英敬、水野 正晴、岩崎 泰政
●印刷所／レタープレス株式会社　〒739-1752　広島市安佐北区上深川町809番地の5　TEL 082-844-7500 FAX 082-844-7800